

伊久礼

第六十九号



井栗公民館刊

伊久礼

第六十九号

はじめに

井栗公民館長 五十嵐 章雄

今年も皆様に御協力をいただき文集「伊久礼」第六十九号をお届けすることができました。御寄稿いただきました方々並びに、関係者皆様に心より厚く御礼申し上げます。

さて、今年も四字熟語を巻頭に載せさせていただきます。

「安穩無事」（問題ごとではなく、暮らしが穏やかなこと）

「あんのんぶじ」と読むのだそうです。同じような意味で「平穩無事」という言葉もあります。

新型コロナウイルス感染症も、五月にインフルエンザ並みの第五類感染症に分類され、かなり以前の生活が戻ってきたように思われます。しかし、感染が収まったわけではなく、まだまだ油断できない状況ではあります。さらに今年には異常の上に、さらに異常とも思われる夏の暑さ。地球温暖化もここまで来たかと思わせられました。さらに世界目を向ければ、ウクライナをはじめアジア、中東などで悲惨な戦いが行われており、終息の様子もありません。

せめて来年は少しでも「安穩無事」な世の中であられますよう、という願いをこめて選ばせていただきました。

最後になりましたが、文集「伊久礼」をお読みいただいた皆様には、ご意見、ご感想などをお寄せいただきましたらありがたく存じます。今後ともよろしく願っています。

令和五年十一月

目次

題字 元井栗小学校校長 故安中久雄（俊道）

はじめに	井栗公民館長 五十嵐章雄	2
回想記	飯塚吉平	4
のんきのととの従軍日記(二)	青山三郎	7
藍と紅花(二)	酒井文男	8
道端にその花が咲いている	遠藤カツ子	12
私の山歩き、山ある記 七	菅原昭子	14
いわきラブストーリー	金子靖夫	18
作詞 田上のひとよ	長橋正宣	23
作詞 保内の女	長橋正宣	24
作詞 燕の女	長橋正宣	24
佐渡ヶ島の俳句	旭小学校五・六年生	25
俳句 四季雑詠	伊久礼俳壇	26
あとがき	発刊委員長 大山隆夫	27

掲載順不同

回想記

飯塚吉平

私こと吉平は昭和八年十二月〇日 父吉造、母ナカの間に長男として出雲崎町久田くつた、母の実家で生まれました。同十二月に現天皇(現在上皇陛下)十二月二十三日生れと同月に生まれた御祝いに役場から菓子配られたとの事。五才くらいから夏は海で泳いで、村人が砂浜でおぼれないか見張りしてくれたそうです。この春には小学一年入学の正月に突然父が来て、翌日父に背負われて、越後出雲崎駅(越後線)から越後長沢駅下車、森町へと連れて来られました。のちに、泣いて居る母から取り上げて来たとか、当時は母と姉初枝(十三才)、妹美和子(三才)、姉は吉平がいないと泣いて村中を探し歩いたとか。当時は父も母も親の云う事は(命)、聞かなければならなかったようです。

かくして森町でおばば(村人がそう呼んでいた)と暮らす一年生。おばばに連れられて最明寺参り、のっちゃん、静吾さんとめぐり会い、夜は遊び疲れて囲炉裏端でのっちゃん、渡辺昭と眠っていたことがかすかに思い浮かびます。夏には村の小淵でみんなと泳いでいましたが、泳ぎがうまいので先輩達も一目おくようになりました。プールのない時代でしたね。渡辺ミヤが、

吉平、私が院内の祭り(十月十一日)に行つて、よく日(十月十二日)森町の祭りにのっちゃんを連れて来るから」

と云つて実行しました。村祭りの人ごみの中、あなた達二人を遠くから見ていました。楽しい祭りでしたね。四年生の頃からおばばは何を感じたのか、私を残し寺参りは一人で行くようになりました。

やがて別れの時、新制中学に進む者、学校を去る者、淋しい時でした。中学二年の頃、田屋の仲間を集めて用水路に架かっていた丸太三本を外して筏を作つて、私一人乗つて冒険ダン吉だと田屋まで行き下り、丸太を五十嵐川に流したのです。おばばはそれに気付き、畑の関係者に詫びて廻り、豆腐は売り切れたそうです。おばばは父を呼び、連れて行けと云う事になり、十日町へ行きました。十日町中学に約半年通いました。初めて両親、妹(姉は近くで働いていました)と暮らしました。学校では四人一組の大机で男二人女二人の四人構成でした。



不思議な事に、私の向い前の席に居た栄子が、のちに私の妻の実家の長男まさし正氏の嫁になったのです。十日町で初めて野球を知り好きになりました。淋しくなったのか、おばばが又連れ帰れと父に命じ帰って来ました。森衛君、求君と野球を始めました。卓球の郡大会(加茂)で三位になったり、遠足ではのっちゃんが休みでがっかりして帰つて来たなら、おばばに元気がないと叱られました。つきない話ですが一つ、藤吉先生と諸橋先生(諸橋博士のお孫さん)の動きを感じ、ある日、音楽の時間に先生の机の上に藤吉先生好きと書いて上げておきました。入つて来て、先生はそれを見て顔を赤く染めました。授業中向側から歩いてやがて私の後に来て立ち止まり、厚い音楽の本で私の頭を思い切りたたきました。イタカッター。先生は字を見て私だと気付いたので、さすがです。のちに八木館で同級会があり、出席した先生にあの時痛

かったと話したら、先生は笑っていました。でも思いがかなって幸せそうでした。

そして中学卒業。私は勉強が出来ないのに、何故県立新潟工業高校土木科に入れたのか？当時新潟県建設業協会会長は高橋幸作氏、いわば十日町の高幸組の社長でした。父の勤めている会社の社長です。工業高校は電機・化学・機械の三科でしたが、当時の県は予算がなく建設業界から四百万出してもらって十五年後土木科・建築科を増やしたのです。協会長の鶴の一声で点数が悪くとも入れてもらったのです。現代では無理な話です。古町二番町、如来寺に下宿させて頂き通学しました。白山神社の近くでした。その後の友を案じてた頃、のっちゃんは洋裁学校へ来た事を知り、会いに行きました。白山神社の公園でのっちゃんは卒業したら又会いましょうと云いました。それを胸に秘め放課後には白山球場脇で、二楽フォルコンズの名の野球チームを立ち上げて、白球を懸命に追いかけてきました。和尚さんの従弟北村さんが名古屋から帰ってきて、県内初のパチンコ店を出店しました。北村さんはのちに平安閣（現在ベルナル）の初代社長となり、野球チームの名をもらい二楽と云うパチンコ店を新潟市、長岡市に開店しました。

そんな折、寺の和尚さんに私の祖父の戒名は善山良道居士とありますが、戒名にも意味があるのですかと聞いたら、和尚さんは寺に何かもめ事か変事があり、それを治めたそんな改名です、との事。夏休みに村に帰っておばばに訪ねました。明治生まれのおばばの若い頃、村は森町ではなく元町にあったそうです。院内原の一段下の河川敷で今は約八丁歩の水田になっています。諸橋記念館の対岸の場所です。おばばは離れて院内原に家を建て暮らしていたそうです。その頃ある日最明寺の方から火の手が上り、それを見て祖父は寺へ駆けつけて火の中、寺へとびこみ本尊様を持ち出し無事に守ったそうです。

老和尚の本堂は丸焼けだったそうです。（今から約一一〇年前五十嵐川の大洪水で元町は一軒残らず流され、先祖は森町（白鳥が来ます）へ新たに集団移動して来たそうです）

寺の火事を機に住職は私の祖父母に檀家になるよう、度々勧められたそうです。おばばは悩みました。何故なら、おばばは荒沢の飯塚三左衛門（名字帯刀を許された四〇〇年続く名門）の血を引く女性で、私は何もいらなから又造（刀鍛冶職人）と一緒にしてくださいと、家出して暮らしていました。が、飯塚三左衛門系はみな長禅寺なのです。決断を下したおばば、おじじは最明寺の檀家となり、初代又造、二代吉造、三代目は私、吉平です。寺の住職が亡くなり、村上の方から

伴田さんが寺を引継ぎいらつしやったんだよと聞きました。改めて村の歴史、おばばの人生も知りました。情熱的なおばば様ですよ。（私が三才の年に祖父又造が亡くなりました）

下宿へ帰ってその事を如来寺の住職に話したら、さもあらん義はつくす、山は寺の意味で寺を守った。立派な戒名ですと云われほっとしました。

高校生時代のエピソードも数多く有りますが、長くなるので高校を卒業します。卒業後は当然高幸組で働くものと思っていた所、ある日高幸組の三羽烏と云われた人達、白石さん、坂本さん、吉田さん、東北帝大（仙台）出で父を師と慕う人々（白石さんは後の初代福田組東京支店長、坂本さんは初代大阪支店長、吉田さんは初代仙台支店長、福田組の今日を支えた人達です）が私の両親を訪ねて来て、あんちやを大学に入れようと云う話になり、高幸組の次男高橋正治氏（当時県会議員）に話したそうです。父を高く評価している正治先生は、オレが卒業した日大に入れてやろうと云う事になり、

会社の支援で行く相談がまとまり、日大を受験しました。試験は日大三島支部で行われました。旅館に同じく試験を受けに来ていた中野昭三君と運命の出会いをしたのです。彼とは今も親しく電話しています。

一般教養で一年間三島校で学びました。周りの反対を押し切って応援団に入団しました。あばれ者の集団でした。団長に渉外部に配属させられました。将来私の営業力の第一歩になろうとは、同僚先輩と町のダンスホール(数多くモメ事の仲介をした)に通いました。ダンスの女教師は私を可愛がり教えてくれました。先生は、君達がチンピラにからまれていたのを助けた、沼津から来ている可愛い子は君が好きみたいだから付き合いなさいと云いました。私は初恋の話をしたら、真面目ですねと。ところがある日副団長に呼ばれ、男には守るべき心と実行する心二つある。心は固く守り肉体は大いに使え、悪い先輩ですね。それから女性と遊ぶ事も勉強し一年が過ぎ、二年生、神田駿河台日大理工学部土木科です。中野君のすすめで浦和に下宿しました。二食付き月五千円でした。中野君は平山さん宅に下宿しました。二人は上越の吉川町の出身、同郷でした。中野君の実家は中野木材店で三男でした。平山さんは東京の新潟県人会会長も務めました。中野君の東京での下宿代をまかなうと云う事で浦和に家を建てた。旭印刷(神田に会社有り)社長でした。腹がへると平山さん宅へ行き大変お世話になりました。平山社長の運転するクラウンで中野君と二人日大方面まで送ってもらいました。同級生は「いなー」とうらやんでいました。夏休みは二ヶ月あり、中野君と高幸組の各現場アルバイト修行をしました。長岡市妙見トンネル農業用水路の現場に居た時に森町へ行って見ようと彼を誘って古里を訪ね、八木橋の上ののっちゃんを写しました。今でも彼女は元気かと云っています。三年生になった時、県

内随一の高幸組が倒産しました。三条一の大会社羽賀組も不況のおおりで倒産していたのです。私は帰って来て働くからと云いましたが、私の両親はあと一年足らずだから、とにかく卒業して来いと、おばばを説得して森町の家と畑を売って何とか卒業してきました。おばばは可愛かったのでしょうか。村を離れ十日町へ来ました。悲しい決断だったと思います。私の卒業を待たず十日町の高幸組の宿舍で急死しました。八十八才でした。墓参りのたびにおばばを思い出し有難うと手を合わせています。卒業したものの建設業界は不況で就職先も少ない時代でした。私は十日町へ帰って来ました。これからは社会人として私の活躍が始まります。今回はここまで、ご機嫌よう。

平成二十六年十月

のんきのととの従軍日記(二)

青山三郎

二日 晴 午前患者の受付等をして居るが、佐藤君と十時頃、山の方へ班員一同の水筒をもって、水汲みに行き正午に帰る。夕食後は山の方面山砲へ〇〇君を訪ねたるも勤務中不在にて散歩後帰宿す。

三日 晴 午前〇〇君遊びに来る。午後は予備病院に患者行渡しをなす。夜小銃砲の音引切りなし。

四日 晴 一日中班内に。読書や、囲碁等をする。部内宿营地の地図など下書きをなす。見習医官六名当分の間〇〇〇連隊付を命ぜられ、夜の戦闘初より、小銃、機関銃砲の音しきりで眠れぬ位だ。〇曉戦の砲撃は物すごい。相当の激戦が展開されて居る。我が軍飛行機、気球網にひつかり落下し搭乗者戦死す。前線に進んだらしい。夜は第一野戦の梅川君の所に小出伍長と共に行き九時頃まで居る。雨降りになり明日午前八時出発命令あり。

五日 待機の姿勢あり。

六日 〇〇 午前八時出発す。行軍中雨の為泥濘膝を〇する路に難行軍せり。六時に〇〇廟に宿営。

七日 午前十一時出発。午後五時〇〇店二百米北方地〇〇部落に宿営。

八日 午前七時出発午後五時〇〇舗に宿営す。

九日 午前七時出発。午後六時三十分、御家庄に宿営す。

十日 午前九時出発。午後二時〇〇庄に宿営す。

十一日 午前九時〇〇庄出発。蒙域北方地区に於て、敵機八機の空爆なり。直ちに樹木を利用し避難せり。我が部隊被害なし。午後七時〇〇庄に宿営す。

十二日 午前五時出発。大〇庄附近〇〇部落に午後六時半宿営。

十三日 午前七時出発。午後六時〇〇口附近に到着宿営す。

十四日 午前五時出発シンブウ村に宿営す。戦傷者六名収容す。

十五日 午前七時出発。夜行軍〇〇〇午前一時、〇〇樓に宿営す。

十六日 午前七時出発。午後七時〇〇河〇に到着、夕食を取る。休憩後、午後十一時出発。夜行軍にて〇〇〇に向う。午前七時〇〇〇に宿営待機す。

十八日 〇〇〇にて待機の姿勢あり、敵の弾雨の如し。五月九日より毎日砂塵万丈の眩野を破竹の勢を以つて進撃す。

十九日 〇〇集を午前七時出発。午後二時三十分〇山子到着。直ちに衛生隊より収容患者一〇七名を引継す。収容患者十七名なり。

二十日 〇〇第三野戦病院に患者一一七名を後走する。

二十一日 午前六時小山子を出発す。徐州城外三光廟にて宿泊の待機命令にて行軍す。午前十時徐州三光廟に到着(徐州市街道通過)前進命令を受け、師団司令部と共に桃〇〇に午後七時宿営す。

二十二日 午前十時三十分出発。宿〇に向つて〇〇〇に〇くて南下す。午後九時〇浦線東側の季〇荘に露営す。水の不便にて、炊焚終了。午前一時三十分となる。翌朝水なく飯をたけず。

二十三日 午前六時出発。津浦線に沿ひつつ南下す。〇〇の城壁を目前に望みて、七里庵にて午後四時半宿営す。

二十四日 午前七時出発。午後四時五十分〇〇荘に宿営す。部隊長最後尾につき危険の〇れある為とて約千米前進す(午後八時半)。午後八時四十分〇〇部落に宿営。並びに露営。

二十五日 午前八時出発。目的〇城に午後七時半到着。小学校の支那軍野戦病院跡に宿営す。鮮血を流し患者の被服散乱し臭気物すごい。

二十三日 正〇中学の病院は伝染病院となり、高橋、丹後君等三人にて〇城公立中学の亀井〇備病院に転送になる。

二十六日 高橋君退院す。コレラ患者毎日沢山出る。

二十七日 病院多忙の為、診断〇〇〇〇なし、普通患者と特別待遇にて〇〇。

※この辺によこれが多く中止することにします。〇〇はよく読めない字がある為失礼。

最後に、戦争とは相手を殺さなければ、自分が殺される事であるので絶対にしてはならぬ。

藍と紅花(二)

酒井文男

令和五年の年が明けて一月、乾いたタデアイは家の前の小屋に山積みになっている。去年から作付けをスタートした農事組合法人NSYの仕事に追われてしまい藍染どころではなかったからだ。原料の藍の葉は冒頭の通り乾燥はしているがすくもどころか、まだ茎に付いたままなのである。乾かしてから葉を摘もうと計画したのだが、とうとう年を越してしまった。それにいよいよ本格的に雪が降ってくる予報も出た。山の白さが際立つようになると小生の心はうづくからなのだ。タイミングよく携帯に友の連絡が入った。

「おお、久しぶり。と言うか去年一回行って良かったね。ああ、うん、行くよ。早く起きて待っているよ。それじゃ」

「また行くの？ スキー！」

妻の声の調子から、小生が推測に難しいようなことはなく、明確にその理由は理解できるから、言い訳に困ったものだと考えながら提案する。

「いやね、ほら、断れないよ。俺達くらいの年齢になるとね、誘う仲間に限られているんだ。だからね、次の週はいかないさ。その時にしようよ」

「私はね、手伝ってやるわよと言っているだけよ。あのまま捨ててもいいよ」

いのよ別に」

確かにそうだ。好意からの提案だから、うんと言ってその作業を優先すれば良いだけなのだが、雪のグレンデが頭から離れないし、あの滑走感もこの足と体が欲している。どちらかと言えば誘いに乗る。かといって藍を捨てる訳にはいかない。なにせ藍染は引き分けなのだから。今度こそは発酵がうまくいくはずという自信もある。

「いや、そりゃ困る。また藍染に挑戦したいんだ。今度はきつとうまくいくさ」

「それと、どうするの、紅花染めは。寒い時がいんだって言っていたのにもう冬よ」

立て続けに、たたみかけるように問い詰められる。冬は暇になるだろうと踏んでいたけれど、とてもそうはいかない様相に戸惑う。まだ仕事は現役だから、平日は体があかない。

「いやね、まだ本格的な冬じゃない。二月さ厳冬期は。その時にやるよ」

それは苦しい言い訳ではなくて、紅花染めは寒い冬にすると書いてあったのを小生は読んだのだ。去年収穫して一応、紅餅にした。山形の河内町の紅花資料館へ行ってそれを見て、染め方も確認して来た。それをすっかり妻は忘れたのだろうか？

「はら、水が冷たい方が、色が出がいいって書いてあったんだ」

紅花染めは昔から、冬の寒い時期に行われてるようだ。温度が高いと黄色の色素が吸着しやすくなるからで、それに紅の色素は熱に対して不安定だという理由からだという。

「とりあえずさ、友達の約束を優先してさ、それからじっくり取り掛かるよ」

「あなたは歳なんだからね、無理してカッコつけて、ケガだけはしないでね……」

妻は優しさと鋭い観察眼を持っていると再認識する。小生の滑りをまろで見ているようだ。イケイケガンガンの友達も、ケガしないように滑ろうぜとはいうものの、滑り始めれば勢いがつく。お互いに還暦をとうに超えた男だなんてとても思えないのだ。そう、食堂に入ってサンングラスとヘルメットを取って、白髪と禿げを見せるまでは……。

藍の葉を摘む冬の作業は三日を要した。一日は妻が、そして九十の母も加わって三人で二日。寒い作業場で何とか完了した。感謝である。なんだかんだといっても、こういうような根を詰める女性の仕事ぶりには大変頭が下がる。愚夫愚息のために嫁姑が仲良く協力してくれたのには感謝が絶えない。

余談にはなるが小生の恥をさらすと、若かりし頃妻と喧嘩になったことがあって、出ていくならあなたの方と啖呵を切られた。訳は、嫁に来るとき嫁ぎ先を出てくるようなことはするなと母親に言われてきたから心配をかけたたくないという。小生、その勢いに気圧されて、しかも道理を得て詫びたことがあった。昨今、親も一緒になって嫁ぎ先を出ると言う話もちらほら聞くが、妻の母は今もご健在なので、必要ならばそういう方々に爪の垢を所望してもらっても良い。

さて、紅花染めは藍染よりもなおさら労働コストがかかる。染料の元は花卉だけだから、花を摘めども量が出ない。小生は二百粒撒いて間引

きをして育て、紅餅はようやく二百グラム程度である。染色する生地はそれと同じ重さしかできないから一反分を想像すると気が遠くなる。

江戸時代後期、山形県の紅花は最盛期を迎え、諸国産物見立相撲番付では、東の関脇が最上紅花、西の関脇が阿波の藍玉とされ、当時の二大染料だった。江戸後期には最上千駄と言われるほどに生産され、江戸末期の全国の紅花生産は千五百五十駄と言うからすごい。馬一駄（約百二十キロ）で米が百俵買えると言われたようで、当時の米一石（二、五俵）は一両前後（江戸中期から後期の米価換算では一両は約三〜五万）だから米換算の生産額は二十五億前後となる。小生が作った紅餅が売り物になるとしても二千六百円程度でしかない。いかに広大な栽培面積とぼう大な労働力で生産していたかがわかる。

さて、二月に入りそろそろ立春も近づく頃、今を逃してはそれこそ面目が立たないので決行することにした。さすがに暖房の無い場所の空気や水は冷たすぎるが覚悟を決める。

まず染液を作るのだが、最初に黄色の成分を取り出す。ご存じの通り紅花は黄色い花で、積んで揉むと赤くなる。揉むときに黄色い成分が手につく。つまりそれは水溶性なのだ。そして紅色はアルカリに溶けだす性質を持つから、そうやって分離するようだ。

紅花染めのために用意した絹のストールは、一昨年歴史好きの友に誘われて小栗上野介忠順の墓がある長野県東善寺に、その業績に詳しく、資料も多く集められているというご住職にお会いしに行った帰り、群馬県立絹の里で染色用のものを二本購入していたのだった。

そのストール一本を染めるべく、五十グラムの紅餅を、わずかに酢を

入れた水に一晩漬けて黄色を出す。これも染められるようなので保存する。次にもう一度同じ液を作って揉んで、その液は捨てる。それからいよいよ紅色の抽出に移る。二パーセントの炭酸カリウム溶液を五百シーシー作り、それに六時間つける。そして四回繰り返し返して合計四リットルの染液を作る。紅花の花弁はだんだん薄い色になって、最後にはまるで菓のようになり土色になるから、ほとんど抽出したことになる。

「ねえ、ちょっと手伝ってくれないかなあ。染液は出来たんだ。でも、色むらにならないように揉みながら染めるんだけど、薄めた酢を少しずつ入れて中和するまで注ぐんだ。両方一緒にはできないからさあ」

日曜日の寒い朝、朝食の支度を始めた妻にそういってお願いをした。彼女も興味があったらしく、まして絹のストールだから失敗してはいけないと気遣ってくれたようだ。

この、クルミを洗う時のような黒っぽい液体が本当に紅色になるのかどうか、確かに不安は強い。ストールを入れて揉むがちっとも色は付かない。

「入れるわよ、ほんとに入れるわよ」

助手の妻も不安は隠せない。半分以上入れたらどうか、液はだんだん鮮やかな紅色になっていく。揉んだストールをその液から上げるとピンク色に染まっている。

「いいんじゃない？ 付いているよ色は」

小生は上手く行く予感がしたが、酢がなくなってしまった。

「結構いるんだなあ。もうないのか？」

「みんな使っちゃったわよ」

ペーパー計ではかるとまだアルカリだ。

「クエン酸があったあよな。それを代わりに使おう」

クエン酸は粒状だから、入れ過ぎないように慎重に加えてうまく中和させて染め終える。染液には赤みが残るが捨てる。染めたストールは水洗いをし、わずかに酸性にした液につけて色止めをする。鮮やかな紅色になった。乾燥させるために物干し場に下げると、外に積もった白い雪を背にして除湿機の風に揺れる優しい紅色のストールが綺麗だった。しばし伝統の色の美しさに見とれていた。

一本目を染めてから二月中にもう一本染めて、最後に通販で買った絹とウールの混紡を染めてみた。ウールは良く染まるかと思いきや、やや染まり方が薄い。でもそれが味わい良いので小生が首に巻くことにした。

「おかしいわよ、男がその色じゃ」

どうも妻の目には違和感しかないようだ。赤のワイシャツが似合うと小生に言っておきながら。そういえば、時代劇で赤い首巻をした輩は常に町のごろつきで悪役だ。それも損得ばかりで意地の悪いじじいだ。だが小生の場合は、喜怒哀楽がわかる単純な気取り屋のじじいだと思うのだが……。

春になった。ストールの行き先はあるもので、きれいな色だと次男が連れて来た保育所の娘が言ったから、それじゃママにやっつてと言って渡した。それから、私は残念ながら会えなかったが、亡くなった友の奥さんが遠方よりわざわざ訪ねてこられたので残りのもう一本をあげたと妻が言った。

「いいでしょ？ 私用だったんだから。あなたどうせ今年も撒くじゃない紅花。それでまた染めればいいわ」

確かにそうだ。でもストールはどこ？

「買いに行ってもいいし、ネットで見てもいいわねえ。あなた買えば？」

やはり小生の負担か。染色用の生地はいろいろと入手できる環境にあるのは間違いない。そうであれば紅花は栽培を継続する必要がある。藍だってそうだ。毎年種を取らないと継続できない。

昨年、来年も植えようかなと考えていた時、別な色も欲しいと頭に浮かんで、紫色がないかと思つて調べた。すると紫草(むらさきと読むようだ)という植物の根が古代から紫を染めるのに使われてきたと知る。今は絶滅危惧種になっていて、発芽率が極端に悪いことに加えて病気になるやすく、その植物は育てるのに大変苦労するようだ。だが、万葉の花をぜひ見てみたいと思つた。

「紫草つてのがあつてね、種を買ったんだよ」

「また何か撒くの？ 私を巻き添えにしないでよ！ 畑が忙しいんだから」

しかし、ネットで花の写真を見せると可愛い花ねと言い、妻はもう栽培に前向きになっていたのだった。

道端にその花が咲いている

遠藤 カツ子

道端にその花が咲いている

毎朝、朝ドラ「らんまん」を見てから出勤します。今回その中で、改めて新しいことを知った。それは私が毎日散歩している道端にその花が咲いている。ピンク色をしたとてもかわいい花である。それがあのまんならうが名付けた「ハルジオン」という立派な名をもつ花であることを知った。(まんならうは後に植物者となった牧野富太郎氏である)

何十年と見ていて、どうして名前を知ろうとしなかったのだろうか。いかに「ポーっ」と生きてきたのか。以前、あまりにもきれいなので切って花びんに生けたが、すぐにしおれた。水上げの悪い花なのか、やり方が悪かったのか。いや花は切るものではない、置かれた場所で咲いたところを見てほしい」とハルジオンの声がする。

その隣にはカラスのエンドウも紫色のかわいい花を付けている。この花も秋にはちゃんとエンドウ豆のような実を付ける。同じ遠藤である私はこれまでどんな花を咲かせたのだろう。確実に言えることはただひとつ、三つの実(三人の子ども)を付けた。

ハルジオンも私も生き方はそれぞれ違いますが、ただひとつ同じことはお互い限りがあることです。終わりです。

先日、散歩中に農家の人の草刈り跡があった。ハルジオンの株だけ残してあ

った。あまりにもきれいだったので、刈り取るには忍びなかったのでしょう。まんならうの植物に懸ける情熱は生半端なものではない、あの莫大な資料には驚いた。四十万個もあるという。当時はカメラもなく、全部手描きによるものだ(写生)。一枚一枚ちゃんと葉脈まで描かれている。そして、私が思っていた「オウレン」という花は全く別物であった。だったら、あれの本当の名前は何か？

「これからでも遅くはありません。調べてみてください」とまんならうの声がする。毎朝が楽しみです。

私の実家は岩手県一ノ関市

私の故郷(実家)は岩手県一ノ関市で、その隣が奥州市です。奥州市といえば今、巷をにぎわしている大リーグエンゼルスの大谷翔平選手の出身地です(水沢)。彼に対する自分の思いを伝えたいと思います。

人は皆、彼を「天才」と呼ぶが、人間は天才という才能を持つて生まれないと言う。だったらなぜ天才と呼ぶのか？それは生まれた後で決まるという。生まれた後の「努力」次第だと言う。彼も三歳の頃からバットを握ったと言う。それがあの二刀流だ。どんなに低い玉でも打ち返しホームランとする。一昨年、北京オリンピックに出場した地元出身である岩淵麗楽ちゃんも同じことを言っていた。

「カダルを逃したのは努力が足りなかった」と一言、四位だった。今次回のメダルを目指し懸命に練習(努力)している。

五月の連休に実家に行って来た。いつも車で帰るのですが、今回は新幹線を

乗り継いで行った。大宮から一緒に同乗した少年が居た。(小学五、六年生かな)

「これから花巻まで行つて大谷選手の生家と花巻高校を見て来る」と言った。私は、そこに彼は居ないでしょう」と言つたら、それでいい」と言つた。どうしてどうしてこの子の将来も見たいと思つた。小学校は田んぼの真ん中にあるのよと余計な事も教えた。

この子は大谷選手を越えるのでは？まさか、いや人生には上り坂・下り坂・そして、まさかの坂もある(まさかは死だけじゃない)。

まさかあの人が「まさかそんな事が」と、まさかは色々な例えに使われる。岩手に列車が入つた。歓迎「歓迎」の横断幕が目にした。私は一ノ関で降りた。彼は花巻まで行つたでしょう。その後の感想も聞いてみたいものだ。

「寅は死して皮を残す。人が死んだら名を残せ」と言う。

大谷君、あなたは藤原三代同様奥州市が生んだ偉大な英雄である。後世に名が残る事間違いないし。どちらも残せない人はさて何を残せと言うでしょう。

先日栗山監督がこんな事を言つていた。

夢はみるものではない、叶えるものである」と言つた。

大谷君、あなたは夢が叶つた一人である。どうかその子達に教えて下さい。努力すれば夢は必ず叶う」、努力に勝る天才はなし」と。それは野球だけじゃないと思う。

そして彼は決して、いばらず、自慢せず、飾らず、穏健な人である。そういう人に私もなりたいたと言つたのは、確か花巻出身の宮沢賢治であつた。どう

かケガや病気に合わないよう、未来の子どもの達のお手本になって下さい。

あれから五十六年

私の故郷は、岩手県一ノ関市川崎町という所です。町のはずれを流れる雄大な北上川の下流に広がるのかな田園地帯に生まれ、そこで十八年間暮らし、四年間のブランクを経て二十二歳で三条に嫁いで来た(ブランクは東京にいた)。

当時は、親・兄弟・親戚とみな敵に廻し、たった一人だけ見方であつた彼(夫)を信じて着いて来た。二十二歳という〇の力は今の照の富士よりも強かつたようだ。今は十両にも勝てん(〇の中は想像にお任せします)。三条市民となつて、今年の十月で五十六年になります。とうに半世紀は過ぎた。時の流れは早かつた。

家業を手伝いながら、三人の子どもを生み育て、四人の孫とも会えた。その子達もみな家庭を持ち、それぞれのレールの上を走っている。もう親のレールからははずれた。今私は守りの体制である。

これまでも色々な事があつたけれど、その都度周りの方々に助けていただいた。

「本当にありがとうございました」

感謝、感謝の念でいっぱいです。自営業なので、今だ会社へ行つていますが、仕事は以前の半分も出来ません。しかし、年々口だけは達者になり、いつも余計な事を言つては墓穴ばかり掘つています。後どの位の余生になるか分かりませんが、このまま元気なうちに、銀の馬車が迎えに来てくれる事を望ん

でいます。

そして又来世もナイチンゲル(鳥)となってこの地に舞い下りて来たい。反対されてこんな遠くまで飛んで来たが後悔はしていない。

大谷翔平選手じゃないけど、努力すれば、夢は必ず報われる」とね。身を
持つて知った。

市民の皆様ありがとうございます」

私の山歩き、山ある記 七

菅原 昭子

夏山 鹿島槍ヶ岳・五竜岳の旅

二〇〇三年今年は短期決戦、続けての休暇が取れないため二泊三日で夏山いいとgetもたぜ！この夏は雨続きだったが、私の山行中にはありがたことに天気は恵まれ久しぶりの北アルプス満喫してきた。キレット越えがあるので極力荷物を軽くして身軽に行動できることを念頭においての山行だった。

目的山城

鹿島槍ヶ岳二八八九m↪五竜岳二八一四m↪唐松岳二六九五m

行動予定

入山日 扇沢↪柏原新道↪冷池(つべたいけ)テント場幕営

二日目 冷池テント場↪鹿島槍ヶ岳↪五竜岳↪五竜テント場幕営

最終日 五竜テント場↪唐松岳↪八方尾根下山

入山日 朝八時二十分扇沢登山口スタート。冷池テント場十三時二十分到着。受付で二十二番の札もらってテント設営。(飲料水は山

小屋から一リットル一五〇円で買う。テント設営料五〇〇円)通常

三十張り程収容可能、今日は五十張りとかで激混み。十六時過ぎ

には通路(登山道)までテント張りでした。夕方山小屋スタッフがテン

ト札回収に来た。明日は鹿島槍往復ですか」と聞かれたので 五竜

までです」と答えると 女一人でこの荷物背負って五竜まで……顔が

半ばあきれていた。私も笑つてごまかす。明日の天気心配です」が本音かな。あちこち賑やかなテント村、でも二十時には静かになった。夜中風が出てくる。朝方まで続いた。

二日目 三時三十分起床、軽い朝食、飲料水確認、テント撤収。まだほとんどのテントは寝ている。鹿島槍往復だつたらゆっくりでいい。

四時四十分出発。朝は冷んやり。鹿島槍と劔岳がはつきり見える。朝日が昇り始める。いつもながら荘厳な御来光。今日も晴れるぞ！

六時五分鹿島槍南峰着。展望良好素晴らしい眺め：遠く槍ヶ岳、穂高岳まで山座同定できる。でもなんとと言っても近間の劔岳、残雪の劔はいいねえ。

南峰降りて吊り尾根へ。険しそうな下りを進み北峰と縦走路の分岐にザックをおいて空身で北峰へ。北峰の山頂からは遙か谷底にキレット小屋の屋根が光つて見えた。あそこまで行くんだ。写真数枚撮つてすぐ下る。目指すはキレット、気持ちはこれから先のコースに飛んで行っている。分岐点まで戻る。ここから気を引き締めていこう。これくらい岩場なら問題なし。快適に進む。初めはドンドン谷底へ下りる。小さなアップダウンの繰り返し。やがて鎖や梯子が出てきた。岩場のゴツゴツコースを慎重かつ丁寧に進む。ようやく来た来たキレットの看板あり。おっここがキレットか、ずつと深く切れ落ちて光届かぬ暗い奈落の底！下見ればそりや恐いだらうから見なきやいい。普通に歩いて行けばいい。でも覗いてみたい。最後に慎重にトラバース(横へり)してキレット終了。

七時四十八分、キレット小屋着。キレット、キレットと言うけれどどしつかり整備されてあった。自分の身を確保しながら一番最初にこのルート仕事を

された人達はずいぶんご苦労だつたらうな。お陰様で一般コースとして歩けます。ありがたい。感謝あるのみ。時間が早かつたせいか鹿島槍北峰を下つてもまもなく山慣れた感じの夫婦連れとスライドしたほかは誰にも会わなかった。ラッシュにならなくて良かった。誰もいない静かな空間「私しかいない」を意識させられた。クリームパンを食べてちよつと一息していたらキレット小屋のスタップの姿が見え布団を干し始めた。何だあ、一人じゃなかった。

八時発、小屋のトイレの脇の岩場の登りから始まる。鎖が整備されてあるが登る分には鎖に頼らなくていい。ホールドスタンスはしっかりしている。下りはザックが大きいと岩に接触し前向いて降り辛いので鎖があると都合がいいと言つた具合だ。アップダウンを繰り返しながら登っていく。

八時五十分、口の沢(くちのさわ)鞍部で逆コースの人達が休憩中だった。鹿島槍越えてキレット越えてずいぶん来たぞ。五竜にドンドン近づいて体調は良いし納得のペースで行ける。ピークで逆コースの人の通過を待つ。G5のピーク(Gは五竜のG、G一からピークに番号がつけられている)に取り付いている様子をしっかり眺めながら。その奥に五竜の最後の登りが厳しそう。

十時十分ピーク発、鎖の連続、緊張する??どこか結構楽しい岩場。手も足も使つて三点確保、これ基本ね。核心部こは楽しめた。

十時五十分、五竜との鞍部で休憩。水分補給、五竜を下ってくる人の通過待ち。最後の人がなかなか降りてこない。やつときた。五十代後半のご夫婦。トウちゃん空身、カアちゃん小さなナップザック。あまりの軽装に思わず今日はどちらまでですか?と声をかけた。氏いわく、小屋から下ります」私「ア……(キレット小屋からはあり得ない)」五竜の小屋から遠見尾根下りま

す」とカアちゃん。コース違っていることを説明してあげると、まごうりて登ってきた時こんなところあったかあ」と思っていたそう。山頂で五竜の小屋へ引き返すところ間違えて縦走路に入ってしまったのだ。たった今やつこのことで降りてきた五竜を（集合時間に？）遅れたら大変と、それがすごいスピードで登り返していった。火事場の馬鹿力みたく不思議なパワーが出るものだ。

十一時五分、今度は私が登るぞ。ザレ場の急な登り落石を起こさないよう気をつけてね。

十一時四十八分、五竜山頂着。ヤッター！振り返って鹿島槍ヶ岳、うーんあそこから来たんだよ。G五のピークなかなか見応えあり、五竜岳の小屋も見える。劔も薄く。まもなくガスつてあまり展望がなくなつた。山頂で休んでいた人の顔や腕が赤く日焼けしているのを見て私自身大分日焼けした事に気が付いたがもう遅い。（私の場合赤くではなく黒くダナ）でもその時はそんなことはどうでも良かった。五竜に無事着いた。嬉しかった。下山開始。喜びをザックに詰め込んでリズムカルに岩尾根を下り、十二時四十分、五竜山荘、五竜のテント場着。テント設営代五〇〇円。小屋の女性スタッフにどっちから来たか聞かれたので冷池からと答えると何時に出たかとまた聞かれ、四時四十分に出て五竜に十一時五十分に着いたと言ったら、指で時間を数え早いとびつくりされた。普通九時間コースだそう。七時間と十分は素晴らしいね。劔も槍も穂高も鹿島槍もみくんな見え気分最高の縦走コース、晴れて良かった。過去二回雨でエスケープを余儀なくされていたので本当に嬉しかった。普段は飲めない人なのだけど今日はビールで祝杯気分。三五〇ミリリットルで六〇〇円。小屋の前のベンチでのんびり景色を堪能し人々の様子を眺め

ているのもなかなか面白い。

山の見えるところで生活したい」と仕事を辞め（旅行関係の会社で海外のトレッキングツアーなどにも同行していたとか）川崎から信濃大町に移り住んだという人と話をした。よほど山が好きなんだなあ。静かな口調で語る山への思いに共感するものがあつた。昨日（土曜の夜）山小屋は一畳に三人だったそう。冷池山荘でも同じ事を云つた。どこも激戦区、現代山小屋事情だな。その点テントはゆつたりとらくちんだ。・・・食事五回目の方々の呼び声が目覚めた。テントの中でウトウトしたらしい。十九時三十分だった。まだ食事にありつけない人がいるのか。大変な混み用だ。夜星がたくさん見られた。山中泊の楽しみの一つ。また明日も元気に歩けますように、おやすみ。

最終日

四時四十分起床、よく眠れた。小鳥のさえずり、低灌木の緑、清々しい朝、今日もいい天気。野菜ジュースでは物足りずやっぱり生野菜が食べたかった。

五時十分発、唐松岳を目指す。鎖場の通過に逆コースの人を待つ。次から次へ登山者がつながつて来て待っても待ってもきりが無い。すみませ〜ん。そこでいったん止まってください。こちらから行きます。」と声を出す。やっと進めた。交通整理がいるみたい。こちら八方尾根からのコースはゴンドラが使えないため朝から混みあつてた。

七時三十五分、唐松岳山頂。白馬方面、五竜方面、劔も、富士山も、南アルプスも加賀白山も八ヶ岳もぐるりとみーんな見えた。それにしても五竜岳が威風堂々、こんなに見応えがあるとは！この景色に心奪われる。降りたくないけど意を決して下る。八方池で高山に咲くお花たちを観察、愛でながら

休憩していると大ザックを背負ったスキンヘアーの山屋さんに声をかけられた。彼は糸魚川の親不知から一週間の計画で入山した。この先鹿島槍までの予定であったが足のままが深刻な状況になったため八方尾根下山となったとのこと。山の格好をした人はなるほど大勢いるが山屋同士お互いに様子でわかるらしい。以前から興味のあつた梅海新道の情報を得る。来年は梅海新道から朝日岳へが良さそうだ。梅雨明けと同時に頃がおすすぬ。黒岩平は素晴らしくこの世のものとは思えない程素敵な所だつて。今回熊に遭遇したそう
だ。……麓の温泉で汗を流し、山の余韻に浸りながら白馬駅前でお土産を
たくさん買って……今年の夏山は無事終わった。

平成十五年八月二日〜四日盛夏 単独

安達太良山一七〇〇m

一月厳冬の女子二人山行。今日このタイミングで晴れ渡る僥倖。早朝の空気は凜として吐く息も白い。白樺や唐松の森は粉砂糖をまといカリガリに凍っている。しばらくして朝の光の一矢を受けた瞬間その一粒ずつがキラキラ輝きだした。これから先の景色に期待。樹林帯の中は前日のトレースが残っていた。五葉松平辺りから風の影響でトレースは途絶えほとんどない。雪の上はコース取り自由に歩けるが、無駄なく急登も避けつつ夏ルートから大きくはぐれぬよう要注意。行く手の樹木の高い枝に劣化したテープを見つけると「正解get」と気分はゲーム感覚で明るい。樹林帯を抜けると最上部は広い雪原で、クラスト状態。シユカブラ(風紋)が美しい。ここからは竹竿ピンクテープのしっかりした誘導があり助かる。トレースのないまっさらな雪斜面、アイ

ゼンを効かせて順調に進む。素晴らしい雪景色に思わず歓声が飛び交う。写真が大忙しでなかなか前に進まない。和尚山からのルートとも合わさって山頂標識。どうやら今日の山頂一番乗り。

しばし貸切状態で景色を堪能し高揚感Max。磐梯山、飯豊連峰、西吾妻は真つ白。山頂は寒く感じないがスマホを操作する指先だけは冷たい。私の経験では今日が今までで一番の安達太良登山日和となった。晴れの予報だったので相当の混雑かと予想していたが平日のためか私の知る限りでは十五、六人くらい、入山者は少なかった……らしい。

冬の牛の背の強風はどの程度かと興味深かったが(安達太良山は冬の強風で有名)耐風姿勢の必要もなく想定内の風、ただ顔を突き刺す風は冷たくビリビリ痛かった。風の通り道の雪の状態は表面が不規則に大小のこぶが発達していても堅く凍っていて凹凸で歩き辛い。ただありがたいことに見通しよく、山全体がしっかり見えているからルートに不安はない。回り込んで風を避け、勢至平分岐で山を眺めながらの昼食。

休憩後くろがね小屋(ドツンドツン)大下り、小屋から先はゆるゆると。山頂が見える最後の地点で振り返り 今日感謝とまたね」の挨拶で周回終了。同行者とお疲れのグータッチ。安達太良山と云えば「この上の空がほんとの空」を思い出す今日の空はまさしく本当の空だった。山頂標識で二人揃っての写真は宝物だ。

令和五年一月一九日(木)同行者カトさん

石鎚山(いしづちさん)一九八二

コロナのために足踏み状態だったがようやく県外遠征登山が再開した。四国の山、二座目は石鎚山。古くからの山岳信仰の山である。修行の鎖場と天狗岳は興味津々。はたしてどんな感想に至るやら・・・登山日が土曜日となるため渋滞に巻き込まれないように、どうせ泊まるなら麓ではなくロープウェイ上、石鎚神社前の白石旅館に宿泊。山の幸たつぷりの良いお宿だった。前泊のおかげでロープウェイ始発七時四十分より早く我々はスタート。自分たちのペースで行動できて作戦成功。楽しみな鎖場は直径二十センチもあるゴツゴツイ鎖、気合を入れて臨んだ。腕力に頼ってウンシヨツと力を込めるところもあるが基本は足場(スタンス)をしっかり見定め三点確保で。天狗岳への痩せ尾根も問題なし。岩場は乾いているし、天気も良くサイコー！

緑とウグイスの囀りが心にしみる。混雑を避け、思うままに展望を楽しみ山の空気をいただいた。名花アケボノツツジの満開時期には間に合わなかったが、ちらほら残り花が咲いていて待っていてくれた。お花たちにも感謝。

令和五年五月二十七日(土)同行者相方

いわきラブストーリー

金子靖夫

東京千代田区・ジャパン放送・放送ブース

「こんばんは。そして、おはようございます。時刻は午前零時になりました。ミッドナイトジャパン。今夜のお相手はチェリーです。今夜は中秋の名月。満月の夜空です。東京千代田区はきれいな月の夜ですよ。皆さんのお住いの地域では、満月が見えていますかね。私は月見酒をしたい今日この頃なんです。最近ハマっているのは、京都伏見の俵酒造さんの純米吟醸酒なんですよ。まろやかで、フルーティー感があつて、おいしいんですよ。京都のお酒だけに、湯葉なんかをアテにして、キンキンのヒヤでいきたいな。興味のある方は俵酒造さんの公式サイトでチェックしてみてくださいね。それでは、今夜の一曲目。浜通りのケン坊さんからのリクエスト、エレファントカシマシの『よいの月のように』です。どうぞ」

常磐自動車道・守谷パーキングエリア内停車中。大型トラック運転席キャビン

亮介は、ホットコーヒーでフルーツサンドを口の中へ流し込みながら、ちえりの放送を聴いている。

なにが月見酒だよ。こっちは月見コーヒーでフルーツサンド食ってるよ。ちえりのヤツ、つきあつてる頃はお酒はうけつけない体質なんて言ってたくせに。酒の味なんて、いつ・どこで・だれとおぼえたんだか。それにしても、エレカシの『

よいの月のように』とは……。ケンちゃんもタイムリーな曲をリクエストしてくれるべ。うしと。休憩もととり、腹ごしらえもしたとどだし、豊洲にむけて転がすつべか。

磐城自動車道・新潟県阿賀町エリア走行中。大型トラック運転席キャビン

新潟へ向け高速道を九十キロくらいで転がしながら、目はキャビンの前方に注意をほらい、耳はカーラジオに集中させているケンだ。

一曲目でリクエストかかるなんて、ラッキーだべ。しかし県境超えたら曇って月なんて見えやしねえ。ま、平場に出れば晴れてくるかな。うし、新潟亀田市場まで運転がんばつ。

いわき市小名浜エリア

小名浜で積み込んだ岩手・宮城・福島の魚介を豊洲市場で下ろした亮介は、下道でいわきに戻った。朝7時前に会社のヤードへトラックを駐車させ、マイカーの軽乗用車に乗りこんだ。シートを倒し朝日を眺めながら、同僚のケンの戻りを待った。

コンコン！運転席窓が叩かれる音で気が付いた。どうやら寝込んでしまったようだ。窓の外にケンのニヤニヤした顔があった。

亮さん、おはようおす。疲れてますね」

おう。ご苦労様。俺、三十分くらい寝てたか」

ですかね。ほんじゃ、メシ行きますか」

うん。でもケンちゃん。愛妻のミカちゃんが朝食作って待ってるんじゃないのか？俺につきあわなくていいべよ」

いや、今日はメシ食いながら、亮さんと話したいんですよ」
なんだべ。あらたまって」

いわきの小名浜エリアには早朝から営業している食堂がポツリ、ポツリとある。行きつけの店の駐車場に、亮介は軽乗用車を、ケンはミニバンを駐車させた。

オワシの焼き魚定食を二つお願いします」

オーダーしたケンが、亮介に相對してきた。

亮さん、今日のチエリーさんの放送聴いてましたか？」

ケンちゃんのリクエストかかったね。あと、ちえりが日本酒通になってるなんて初めて知ったべよ」

あ、じゃなくて。エンディングのほうす」

あ。その時間帯は……。俺豊洲で荷下ろし作業中だべ。生放送中にちえり、なにかやらかしたか？」

チエリーさんアクアマリンのPR大使に任命されて、今度いわきに凱旋帰郷するんですよ。詳しくはオフィシャルサイトをチェックしてくださいね……。なんて言ってみました」

へ。震災からこっち、コロナ感染渦もあつたりして、アイツいわきを捨てたんじゃないか。ローカル局のアナウンサーやってるより、東京にでて売れっ子パーソナリティになった方がアイツのためにはいいことだけだな」

いや、亮さんはチエリーさんのこと誤解してますよ。チエリーさんの「いわき愛」ってほんばないすよ。いろんなところで、いわきをはじめ福島の復興を呼びかけているんすから。いわきを捨てたのは伊東美咲の方すよ」

十二年前の東日本大震災当時、福島エールテレビの局アナだった坂下ちえ

りは、被災現場や避難所の様子を素のままの感情を豊かに伝えていた。また被災者・避難者に明るく励ましを送るリポーターで視聴者の共感を得て、感動を与えていた。全国的にも注目を集めたちえりは、東京のエージェントのスカウトを受けて、活動の拠点を東京にすべくいわきを去っていった。そんなちえりと亮介の交際のきっかけは、二人の高校時代にさかのぼる。亮介とちえりの母校は、福島県内では常に花園を狙えるラグビーの強豪校だ。高校三年の県予選決勝で、亮介は相手選手の独走を猛ダッシュでタックル。トライを阻止した。しかし、そのタックルの際に右肩を脱臼。一年生でまだ補欠だったケンと、女子マネージャーのちえりがサポートしてくれて担架で運ばれた。コーチは、ケンとちえりに救急車に同乗して病院へ付き添うよう指示をした。到着した救急車に乗り込むと、ちえりが涙を浮かべているのをケンは見逃さなかった。痛み止めの麻酔が効いているのか、亮介は救急車の中で眠ってしまっていたようだ。

坂下さん。俺、亮介先輩の家族とかコーチとかに連絡してきますんで、亮介先輩に付き添って、元気づけてください。あの、坂下さんは大丈夫ですか？ さつき泣いていたみたいだけど」

「ごめん。大丈夫。私が泣いていたら亮介君が変に思うよね。しっかりしないとね」

亮介は検査のために一日だけ入院が必要だった。試合の結果が気になる亮介だったが、麻酔が切れて目覚めてみると、痛みの感情の方が強い。病室を見渡すと、坂下ちえりの姿しか見当たらない。女子の前では痛そうな表情は出せないが、無理だ。顔をしかめながらちえりと相対する。

試合は、なんとか勝てたみたいだよ。亮介君は治療に専念しろって、コーチ

からの伝言。あと、ケン君が家族の方に連絡してくれているから。あとはなにも心配しないで」

ちくしょう。みんなと一緒に優勝の瞬間を迎えなかったのに。坂下も俺のこととはほつといて、早く戻ってくれていいよ。みんなと優勝の味を分かち合いたいたい」

なに言ってるの。スタンドオフのあなたが回復しないと、花園で勝てないのよ。いまはチームのことより、亮介君のことの方が大事！」

こんな出来事がきっかけとなり、交際に発展した。その後亮介は新潟の大学でスポーツ経営学を学び、ラグビーのプレイヤーから指導者の道を模索するようになった。一方のちえりは仙台の大学を経て、地元福島の放送局にアナウンサーとして就職した。学生時代四年間は新潟と仙台の遠距離恋愛だったが、亮介が郡山に本社を置くスポーツ系のアパレルメーカーに就職したことにより、二人の距離はがぜん近くなった。そろそろプロポーズを視野に入れてもいいかなと考えていた亮介だったが……。そんな最中、東日本大震災が起きた。

震災により会社の事業は縮小。人員削減。最終的には大手のアパレルチェーンに吸収されることとなった。亮介自身もリストラにあった。そんな亮介にラグビー部後輩のケンが救いの手を差し伸べた。ケンは父親が役員を務める物流会社のトラック運転手になっていた。長距離トラックカーといつても、ラグビーのマネジメントを勉強する時間はとれるだろう。亮介はケンの誘いを受けトラックの仕事に就くことにした。そして、東京を活動の拠点にしたいと言うちえりには、自分の存在が邪魔になる

だろうと考えた。亮介が別れを告げ、ちえりは受け入れた。震災と大津波は、

街を破壊し、人の心も打ち砕いた。震災・津波への憎悪。ちえりへのロス感。こんな揺らいだ精神状況じゃだめだ。これからは物流の世界で郷土の復興と人々の心の復興に賭けるんだ。

坂下ちえりは東京で「チエリー」として大活躍。ドキュメンタリー番組のMCやラジオのレギュラーを何本か抱えて売れっ子の仲間入りをした。対照的に亮介は故郷復興のため物資や地元産品の輸送に専念した。イワシの焼き魚定食での朝食を食べ終わり、店の駐車場でケンと別れた。アパートに帰り、シャワーを浴びて、ベッドに潜り込む前に、亮介は、スマホで「チエリーのオフィシャルサイト」を閲覧した。

※

チエリー●アクアマリンふくしまPR大使任命式!!」

日時：十月二十二日(日)午前十時より

場所：アクアマリンふくしま内 マリンホール※入場定員二百名

主催：アクアマリンふくしま・いわき市商工会議所

※入場整理券はアクアマリンふくしま・いわき商工会議所・郡山駅ビル中通りホール事務所で発行いたします。任命式終了後、チエリーさんが館内を巡回します。ふるってご参加ください。

※

ちえりのプライベートは知る由もないが。お互いに三十代の後半だ。ちえりには人生のパートナーがいるのだろうか。別れたとはいえ、俺はアイツのことがずっと好きだ。あの明るさは、沈んでいる俺の心も百八十度変えてくれる。震災ですきんだ人々の心に勇気を与えてくれたあの人間力。会いたい。伝えたい。

俺にもう一度チャンスをくれ。トライさせてくれ。ちえりの支えになりたい。おまえが好きだ」

ちえりとの想い出に浸っていると、ほどなくケンからメールが届いた。

亮さん。入場整理券のゲットは、まかせてください。ミカを連れて、俺も行きたいですから」

いい先輩に恵まれたものだ。快くケンの好意に甘えることにした。

「アクアマリンふくしま・マリンホール」

任命式は、これで終了します。お昼休憩をはさんで、一時よりチエリーさんが館内受付をスタートして、アクアマリンふくしま内を巡回します。お時間が許す限り、当アクアマリンふくしまで、お楽しみください」

女性MCの閉会挨拶が終わると、ケンが声をかけてきた。

亮さん。チエリーさんに接触するのは、最初の受付がいいんじゃないですかね。手紙か何か渡す作戦はどうすか。亮さんのこと忘れてなければ、ノンマスクならいけるはずですよ」

私、メッセージカードセット買ってあるんです」言っただけがバッグから可愛らしいライトピンク色のカードを取り出した。

おい。中学生じゃないんだ。そんな作戦で大丈夫か」

いや。大丈夫ですよ。秘めた亮さんの想いを文字で伝えましょうよ」

館内のレストランでケン・美香夫婦と三人で食事した。いよいよ午後一時が迫ってきた。もはや躊躇してられない。ミカから渡されたメッセージカードに記入した。

今日はお疲れさま。どうしても君に会いたくて。驚かせてゴメン。東京で大

活躍のちえりが、いわきのことを忘れないでいてくれて、うれしかったよ。俺は展望タワーで閉館までずっと待っている。君に俺の気持ちを伝えたい。もう一度トライさせてくれ。もし来れないなら連絡くれ。

080-0000-0000 亮介」

亮介は、ケン・美香夫婦とレストランで別れ、受付へ向かった。

アクアマリンふくしま・展望タワー

受付口でちえりにメッセージレターを渡した時……。ノンマस्कだったこともあり、亮介と目が合ったちえりは一瞬驚いた表情だった。メッセージレターを受け取り、スタッフジャンパーのポケットに仕舞いつつ、「いらっしやいませ。楽しんでいってください」と笑顔の挨拶でかえしてきた。

閉館時刻の午後五時半がせまってきた。

秋は日暮れが早い。展望タワーから見る海はブルーから濃紺に変わっていく。今のところ、ちえりの姿は現れない。連絡もない。いつの間にか、展望タワーの最上階ホールは亮介一人になっていた。五時二十五分。諦めてエレベーターへ向かうと……。昇降口からスタッフジャンパー姿のちえりが降りてきた。

お客さま。閉館の時刻が迫っております。出口ゲートまでお急ぎください。ありがとうございます。来てくれて。でもおまえ、マネージャーさんとか、主催関係者とか……。相手していなくて大丈夫なのか？」

大丈夫。まずここを出しましょう。今日は内郷の実家に泊まることにしているから。マネージャーは一人で東京に帰ってもらった。あと商工会のお偉方とか、アクアマリンの関係者には東京で仕事が残っているからつて、夜の食事はお断りしてある。とにかく急ごう」

わかった。内郷へは俺の車で送るよ。軽自動車だけど、いいか？」

オッケーよ。ありがとう」

小名浜から内郷へ向かうバイパス道路走行中。亮介のマイカー車内

「アクアマリンのPR大使ってお話をいただいた時、なんとなくもう一度あなたに会えるんじゃないかって。でも、もう私のことなんか忘れられて、別の幸せをつかんでいるんじゃないかって。朝からビクビクしながら常磐線に乗ったの。」

そのセリフ、のしを付けてそっくり、返したい。俺だって、ここまで独り身でいたのは、ちえりのせいだべ。おまえのこと忘れたことなんて一度もなかったよ。ラグビー部後輩のケンちゃんにのせられた恰好だったけど。今こうして二人きりで話している」

あつ。ラジオネーム浜通りのケン坊つて、もしかしてラグビー部後輩のケン君かなつて。そうしたら、亮介にもつながっていいいなつて、ずっと想つてた」

高三の怪我の時から、アイツには世話になりっぱなしだべ。物流会社のトラック運転手が板についてきたけど。もちろんラグビーコーチのオフアアがあれば、いつでも引き受けられるように勉強もトレーニングもしている」

亮介らしいね。あたしは東京で人気者なんて全然うれしくない。こんなの仮の姿。あと何年こんなことやっついていけるのか……。重たい鎧を早く脱ぎ捨てたい。もう、こんな生活から逃げ出すことにトライしたい。亮介助けて」

スタンドオフの俺からのアドバイスだ。おまえは後ろに逃げるな。ゴールに向かって逃げろよ。俺が敵をタックルしまくる。お前はトライするまで、走り抜ける。俺が支える。俺たち二人の力を合わせればトライできるべ」

ありがとうございます。ね、亮介も実家に寄っていつて。この人と一緒に生きていきます
つて…。両親に報告したい」

ぞうくるべやか。逃げちやダメだべな。よし。ちえりさんを幸せにしますつて
ご両親に宣言すつ。」

久しぶりに二人で見るといわきの夜景は、宝石箱の中みたいに輝いている。さ
あ、バイパスインターを下りれば、ちえりの実家が目の前だ。

遠回りをして、お互いの気持ちの確認に十数年もかかった二人だが、また一
緒に生きていくことを誓った亮介とちえりだった。

END

作詞 田上のひとよ

長橋正宣

一、耐えて待つのが 女なら
男はなにを 待ちますか
恋のしがらみ ほつれ髪
田上のまちに 降る雪を
受けるてのひら もえてます

二、忘れられない 思い出が
頬を濡らして しみじみと
愛しさつのる 恋まくら
護摩堂山の こがれ雲
あすを待てない わたしです

三、抱いて下さい 思い切り
山にいつぱい あじさいが
あなたのため 咲きました
田上のまちに くる春を
見せてあげたい 女です

作詞 保内の女

長橋正宣

一、一目だけでも逢いたいと

風がささやく 姫の城

胸のもみじ葉 なおさら燃える

ぬくもりを ぬくもりを

抱き締めて 抱き締めて

忘れられない 保内の女よ

二、愛の温室には 夢育つ

植えた小松の 風姿のよさ

杉の木立の 枝ふるわせて

鳴りわたる 鳴りわたる

あの音を あの音を

胸で聴いている 保内の女よ

三、長い一冬 耐えてきて

梅も桜も花も咲く

花の盛りは 短いけれど

ぬくもりを ぬくもりを

あたたためて あたたためて

愛を貫く 保内の女よ

作詞 燕の女

長橋正宣

一、俺を信じて 咲いたのか

雪より白い 下がりふじ

人はふりんと 言うけれど

重ね合わせた 心あつい

抱いて 抱いて 抱いてあげたい

燕の女よ

二、二つ並んで 浮かん出る

国上の山の こがれ雲

うしろ指など 慣れてると

言ったあとから 泣いている

姿 姿 姿いとしい

燕の女よ

三、俺とお前の このきずな

刃物でさえも 切れやせぬ

寄つて宮町 恋灯り

ふたり飲む酒 甘い夜

別れ 別れ 別れられない

燕の女よ

佐渡ヶ島の俳句

旭小学校 五・六年生

たたこう館 いろんなたいこ 音ちがう 泉田 統希

進むたび きれいになるよ 日本海 落合 深雪

金山の 歴史は深く 面白い 酒井 陽真

はんしよく期 白いトキが 黒くなる 菅原 李桜

海と山 世界い産の たから島 曾根 希介

佐渡の海 波止場にぶつかり またかえる 鳥羽 諒

佐渡島 行って楽しい 佐渡島 西村 唯那

トキたちも 外が暑くて 涼みたい 小川 蒼太

江戸時代 二つに割れた 佐渡金山 神子島 煌

砂金とり うつわザラザラ いい音色 堀江 美那

新潟港 海と大河の 交差点 矢坂 宗太郎

佐渡金山 昔の人の 苦労知る 山上 結衣

たらい船 運転へたすぎ 落ちちゃった 米山 泰世

四季雜詠

伊久礼俳壇(順不同)

浅漬けの秋茄子の色鮮やかに
存へて卒寿をも過ぎ月見酒
果てしなく流れ穏やか秋の川

鶴巻雄風

散歩の漢案山子に話す何語
ふる里へ夏に光し昼綿
方言で出迎ひ優し帰省子を

村越允弘

秋晴れや遺墨となりし祭旗
木の下で炎天迎ぎ鎌を研く
草むしり腰の疲労の叫び出し

田辺起知

花は散り約束もなし昼下がりに
つまづいて足元見れば犬ふぐり
雲天に一際映へる冬薔薇

山崎洋子

草笛や嵌る道草風多くば
窓の灯や寂寥の夜の虫しぐれ
貧すれど軒昂にして草の花

関宏士

盆の上転がし選ぶ豆の種
鬼灯を鳴らしてあやす媪かな
紫蘇の実や不揃ひの齒にはさまりぬ

村越利茂

川岸に身をひそめたる羽抜鳥
処暑とは名ばかり朝の畑仕事
ふるさとの親へ師走の宅急便

菊田チイ

旧友を訪ねし庭の秋桜
川風の座敷の真中昼寝なり
図書館の静かな机秋の雲

市川明美

陽だまりの空気の優し今日の秋
芽吹く香をのせて漂ふ風さやか
炎昼や白線揺らすアスファルト

田辺克文

玉の汗地球沸騰呼吸辛い
チャットから時代を背う御祓川
汗拭いて体育館で競う友

小出のぼる

雁帰る原発の空遠巻きに
線香のゆれ定まらず終戦忌
晩学の窓より秋の灯をこぼし

関川芳弘

あとがき

文集「伊久礼」

委員長 大山 隆夫

発刊委員

伊久礼も今回で六十九号を迎えることが出来ました。

今年は新型コロナウイルスも五類に移行され、皆様も日常生活を取り戻されているのではないのでしょうか。感染には気を付けて生活をしなければならぬ中で、たくさんの方の寄稿をして頂き、皆様には心から感謝申し上げます。

編集委員を始めて十四年になります。伊久礼の編集の時期が、毎年の私の楽しみとなっております。聞き書きレポでの地域文化や歴史を知って頂き、残していくお手伝いが出来れば幸いです。

今後、たくさんの方々に伊久礼を知って頂き、楽しんで頂ける様努力してまいります。

これからも皆様のご協力をお願い申し上げます。

委員長 大山 隆夫

委員 佐藤 太郎

委員 菅原 昭子

委員 熊倉 貞子

委員 藤田 清子

令和五年十二月一日

伊久礼 第六十九号

発行所 井栗公民館